

# 熊本は私の根っこ。熊本の枠を外れて、 枝はどんどん広がっていい。

眼科医 由富 章子 さん



由富章子さんは、眼科医としての本業を持つ傍ら、地方の文化、歴史に題材をとったドラマづくりの脚本を手掛けています。野外劇「田原坂燃ゆ」の脚本・演出を皮切りに、ラジオドラマ「秀長まいる」、テレビドラマ「八郎の壺」などの企画・脚本も好評を博しました。

また健康についても、医者立場から分かりやすく解説した医学講座を開催。「今昔おもしろ養生訓」「医訳おとき草紙」を執筆。現在「おもしろ医学館」が新聞紙上で連載されています。ドクター、シナリオライター、プロデューサーにエッセイストといろんな顔を持つ由富さんに、今後の夢などを語っていただきました。

自分の中にエネルギーがふつふつと湧いてくる感じがたまらないです。

**熊本に居ても世界をにらんで仕事ができる状況に。これが次の目標です。**

熊本には歴史に名を残すような有名な人が少ないですね。なぜか？ 熊本という人は人を受け入れたり、伸ばしたりするのがあまり得意じゃないからだと気が付いたんですよ。

「面白い奴がいるよ。会ってこらん」人が人を伸ばし、人の輪が広がり、仕事の芽が生まれたりする。今は、ファックスでもパソコンでも何でもあるから、熊本に居ても仕事ができるはず。逆に東京の人が熊本に住んで仕事をしてもいいわけです。「大きくものを考えられる人」を育てようという仕事をしたい。熊本で発信できたら…。

熊本は私の根っこの部分。将来、熊本という枠を外れて仕事をするようになるかもしれないけど、それは枝。枝はどんどん広げて行きたいですね。

新しい事に挑戦する時、  
ふつふつとエネルギーが  
湧いてくる。

「皆さん、楽しみましょう」というのが、  
本日の町おこしだと思っ。  
最初に手掛けたのは、平成二年に植木町で行った野外劇「田原坂燃ゆ」。きっかけは、植木町の商工観光課から「自由民権運動の先駆をなした、明治八年設立の植木学校を町おこしに結び付ける良い方法はないか」と相談されたことから。脚本、演出だけでなく、道具の手配から予算の組み立てまで、全てやりました。総予算が百五十万円。しかも音響だけで八十万円。だから人件費はゼロ。最後に一回だけ、お弁当を付けましたけどね。皆さんボランティアですよ。

人を動かすコツは、お金よりも興味。面白いと思えば、人は動いてくれます。なるべくみんなに出演を作って、少しでもセリフをしゃべってもらうようにしました。町おこしを成功させるには地元の人みんなが「楽しいからやる」という風にもっていくことが大切だと思いますよ。

歴史や食べ物、熊本にはおもしろい財産がたくさんあるのに生かしてきていませんね。それが非常にじれったかったから、「誰もやらないのなら私がやるうじやないか」と思って、そういうものを題材にした脚本を書いたんです。テレビドラマ「八郎の壺」を考えたい、しかも地元の人たちが参加できるドラマを作りたかったから。テレビとかラジオも中央から流れてくるのをただ受けるだけじゃつまらない。自分たちの手で作りましょうよ。

私は「町おこしの仕掛け人」とか言われていますけど、私がやっているのは、裏方の地道な仕事。作物でも実るためには、畑を耕したり肥料をやったりと地道なことをしなければいけないでしょ。ドラマの楽しみは新しい世界が広がること。面白いし楽しいし、新しいことに挑戦するのは人生の喜び。



野外劇「田原坂燃ゆ」で殺陣の指導をする由富さん



よしとみ あきこ

■プロフィール

- 1989年 由富内科眼科医副院長就任  
熊本厚生年金会館主催「老人大学」講師（2期）
- 1990年 庄内日報「跡ぶが如く異聞」連載  
熊日新聞「今昔おもしろ養生訓」連載  
野外劇「田原坂燃ゆ」脚本、演出
- 1991年 熊日新聞「甘辛談義」連載
- 1992年 ラジオドラマ「秀長まいる」脚本  
テレビドラマ「八郎の壺」企画、脚本  
熊日新聞「医訳おとき草紙」連載
- 1994年 テレビドラマ「テレビドラマを作ろう」企画、原案  
熊日新聞「おもしろ医学館」  
「紙面月評」連載中

\*熊本ジェーンズワイズメンスクラブ会長、熊本21ファンドの運営委員、FMK番組審議委員会、熊本県医師会会報編集委員、建設省道を通る女性の会委員、エッセイスト、剣舞道師範といろんな顔をもつ。